

中部圏の大学の魅力を探る

財団法人 中部産業・地域活性化センター
地域整備部 水野 南緒

日本社会のグローバル化が急激に進む一方、それぞれの地域には、その裏付けとなる文化や個性、いわゆるアイデンティティの再認識とブラッシュアップがますます必要となっています。中部圏にある国立大学においても、それぞれの地域特性を踏まえた個性的な取り組みが行われています。

そこで、「中部圏の大学の魅力探訪シリーズ」と題し、各大学の取り組みを紹介してまいります。第6回は、国立大学法人福井大学と国立大学法人金沢大学です。

国立大学法人 福井大学

— 教育・医療・産業、地域に資する研究を柱にした高度専門職業人の育成 —



文京キャンパス全景



松岡キャンパス全景

1. 福井大学の概要

大学概要 (2011年5月1日現在)

【所在地】 文京キャンパス：福井県福井市文京3-9-1

松岡キャンパス：福井県吉田郡永平寺町松岡下合月2-3-3

【教員数】 教授182人、准教授159人、講師60人、助教139人

【学生数】 学部4,154人、大学院1,015人

好循環を生む丁寧な人材育成

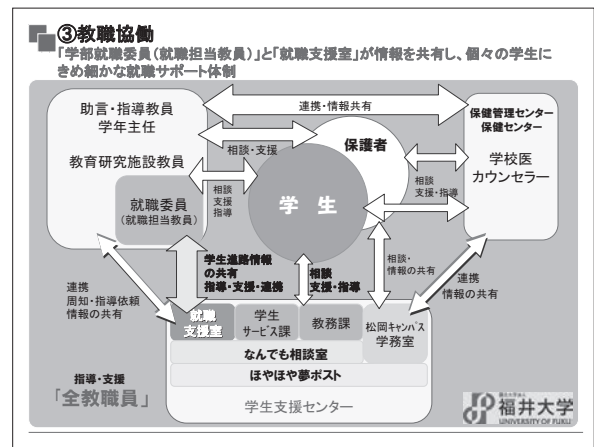
旧福井大学は、福井師範学校、福井青年師範学校および福井工業専門学校を母体として、1949年に新制国立大学として発足した。1978年設置の福井医科大学と2003年に統合し、3学部からなる大学として新たなスタートを切った。教育地域科学部と工学部のある文京キャンパス、福井医科大学を前身とする医学部のある松岡キャンパスの2つのキャンパスを持つ。現在は“地域になくはない人を育てる”「教育地域科学部」、 “生命の尊厳、医の倫理を学び、社会に貢献する医療人を育てる”「医学部」、 “夢を描き、それをかたちにするIMAGINEERを育てる”「工学部」の3学部で構成されている。

学則第1条に、大学の理念として「学術と文化の拠点として、高い倫理観のもと、人々が健やかに暮らせるための科学と技術に関する世界的水準での教育・研究を推進し、地域、国及び国際社会に貢献し得る人材の育成」を掲げ、この理念のもと、新たに『福井大学の12年後』という長期目標を定め、教育、研究、社会貢献の一層の推進を図っている。

小規模ながら、それぞれの学部の持つ強みを活かした、実績ある研究や活動が特徴で、文部科学省・国立大学法人評価委員会による中期目標期間の評価では、教育水準、研究水準、業務運営達成度などが高く評価され、全国86国立大学の中で総合7位となった。大学教育改革支援プログラムでは、これまでに18件（2003～2010年度実績）が採択されており、実力が数字にあらわれている。

学生の構成としては、福井県出身者45.1%に対して東海地区出身者は23.6%と、地理的な近さや産業との緊密な結びつきがうかがわれる。「責任感が強く、真面目で誠実」という、就職先へのアンケート結果で評価される学生の気質は、福井大学の強みの一因と考えられている。

また、就職支援室と学部就職委員とが協働したサポート、携帯端末からも検索が可能な求人票閲覧システム、個別面談など、さまざまな就職支援態勢による企業と学生のマッチングは、企業からも信頼が厚く、就職率は94.7%（2010年度卒業生）と卒業生が1000人以上の大学で国立大学1位、全ての国公立私立大学の中でも1位となっている。離職率も、全国平均35.9%に対し福井大学は8.8%と極めて低い結果となっている。



教職協働の就職支援システム

(参照URL http://www.jasso.go.jp/gakusei_plan/documents/22_2guidance_jirei01.pdf)

2. 教育

グローバル時代をリードできる実践力重視の教育

「21世紀のグローバル社会において、高度専門職業人として活躍できる人材」の育成を目指し、国際的な水準の教育を実施し、学生一人ひとりを徹底的に鍛えるとともに、学生、教員が共に自己研鑽できる環境を提供し、学生の人間としての成長を積極的に支えることを旨としている。

文京キャンパスにある教育地域科学部では、実践力量のある学校教員と、地域の創造・発展に貢献できる人材の養成を目指し、工学部では、科学・技術を通じ、すべての人が健やかに安心して暮らし、豊かさを持続的に享受できる社会を実現する人材（IMAGINEER；IMAGINEとENGINEERの造語）を目指し、幅広い教育を行っている。

また、松岡キャンパスにある医学部においては、幅広い医学・看護学知識、高度な臨床能力、優れたコミュニケーション能力と高い倫理観、生涯にわたり学ぶ習慣などを身に付けさせる専門教育と、教養教育を実施している。

<特色ある教育プログラム>

●地域参画型の授業・教育プログラム

教育地域科学部では、地域とのパートナーシップを築きながら実践している「探求ネットワーク事業」や、不登校の子どもたちに寄り添う「ライフパートナー事業」など、地域参画型の授業・教育プログラムを多数取り入れている。これらのプログラムは、「ワーク・ライフ・バランスを重視した地域社会の担い手づくりの試み」とのサブタイトルにあるように、4年間を通じたキャリアガイダンスで就労への現実的対処を学び、地方に適した総合的な就業力の育成を目指す取り組みである。また、「学校現場が大学院」という拠点校方式による教職大学院は、福井大学方式として、全国の教師教育改革のモデルにもなり得ると高く評価されており、米国、フィンランドの教育研究者にも注目されている。

●高度な臨床能力を備えた医療人の育成

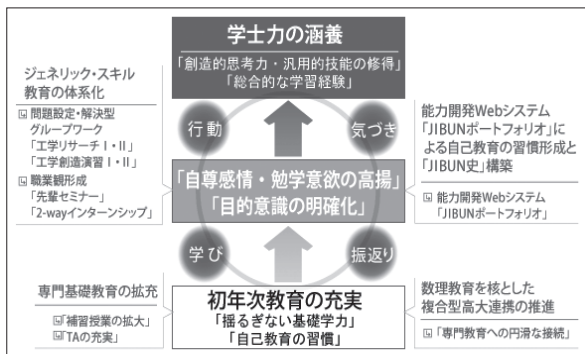
医学科の大きな特徴として、世界をリードする「画像医学教育」が挙げられる。21世紀COEプログラムに採択された、生体画像医学研究に裏打ちされた「がん診断」能力をはじめ、臨床現場で蓄積された、CTやMRIなど数多くの画像データを活用した高度な臨床能力をもった医師を育成する教育を実践している。

看護学科では、さまざまな専門的看護ニーズに対応できる基礎能力の育成を目指し、看護師、保健師、助産師の国家試験受験資格が得られるカリキュラムを実施し、いずれの国家試験でも全国トップレベルの合格率を誇っている。また、大学院医学系研究科では、「子どもの発達研究センター」や「看護キャリアアップセンター」を設置し、「看護キャリアアップセンター」では認定看護師の育成などより質の高い看護ケアを提供する看護職の教育も実践している。

●実践的能力を備えた技術者の養成

夢を形にする技術者の育成を掲げ熱心に進めている教育は、全国的にも高く評価されている。この教育の核となるのが、自分自身で課題を発見しながら解決方法を模索する、創造力を育成する「創成教育」である。共通科目として「学際実験・実習」を設定し、さらに課外教育活動として教員や学生の提案による自由度の高い活動を実践する「創成活動」を行い、総合型体験学習による能力開発を実践している。特に、「創成活動」は自分の専門分野と他の専門分野の関わりを知ることができる貴重な機会であり、異分野の視点を交えることで自分が学んでいることの社会的位置付けを改めて認識し、広い視野を持って専門分野を極めていくことができる。このほかにも、工学部では、初年次学生が揺るぎない基礎学力と自己教育の習慣を身につけることにより、学士力^{かん}涵養の礎となる自尊感情・勉学意欲の高揚や目的意識の明確化を図り、総合的な学習経験と創造的思考力・汎用的技能の修得を確かなものを目指す「学士力涵養の礎となる初年次教育の充実」にも

取り組んでいる。また、工学研究科では産学官連携本部と連携し、2010年度から産業現場に即応する実践道場を構築している。これは、主に博士後期課程の大学院生を対象にしたコースで、産業界の幅広い分野からの課題解決型の実践道場の提供とエキスパートの教育参加によって、「広い視野を持ち自ら考え行動していく自律型産業人材の育成」を目指すものである。また、これまでの実施で地域産業界などから高い評価を得てきた、博士前期課程の大学院生を対象とした「創業型実践大学院工学教育による人材育成事業～「試作・試販売」や「MO T教育」などを通じた人材の育成～」の実績を基礎にしたさらなる発展型の取り組みである。



「志」を大切に育む学びシステム
 (参照URL <http://mech.u-fukui.ac.jp/~honda/GP2009/system.html>)

3. 研究

ニーズを見極め「福井大にしかできない」研究を

研究に係る長期目標に、「教員一人ひとりの創造的な研究を尊重するとともに、本学の地域性等に立脚した研究拠点を育成し、特色ある研究で世界的に優れた成果を発信します。」を掲げ、伝統や地域特性を活かした研究拠点を育成することを目指している。

世界有数の原子力関係施設を擁する地域であることから、原子力や放射線の平和利用・活用を目的とする「高エネルギー医学研究センター」を1994年に、「附属国際原子力工学研究所」を2009年に設置し、放射線を介した医学・薬学・工学融合による医療の向上、世界トップレベルの原子力

研究開発と人材育成などを使命として、社会貢献を実現している。

また、たんぱく質1分子の構造変化をリアルタイムで捉え、新薬開発の道を拓いたこと(医学部)、電磁波の中で未開拓領域である“遠赤外領域”の電磁波発生器「ジャイロトロン」を独自開発し、世界最高周波数(1テラヘルツ超え)を実証したこと(遠赤外領域開発研究センター)など、多くの研究成果が高い評価を受けている。工学研究科でも、「液体窒素冷却高温超電導モータの開発」、「リチウムイオン電池の開発」など多くの研究実績を持つ。

なお、これらの研究は、福井県科学技術大賞などを受賞している。

<福井大学の特色ある研究例>

●子どもの発達研究センター

子どものころに関する基礎・臨床研究を推進し、研究成果の社会還元を目的として、2009年に設置。うつ病などが大人だけでなく子どもの間でも深刻化しているという現状を受け、2011年からは大阪大学、金沢大学、浜松医科大学、千葉大学とともにオールジャパンの教育研究体制により、子どものころの諸問題の解決に取り組んでいる。

●低炭素革命を推進する高効率太陽光発電システムの研究開発

工学研究科が世界に向け発信する「窒化物タンデム太陽電池」の研究開発。タンデム型太陽電池とは、性質の異なる複数の半導体を層にして積み重ねることによって、より効率的に太陽光を電気に変えることができる太陽電池。既存の太陽電池の変換効率が約15%であることに対して、タンデム型太陽電池では45%を超える変換効率が期待されており、画期的な高効率太陽光発電システムや高出力電気自動車などへの利用・実現化を図る。

●難治性がん治療に向けた機能画像法の開発

今日、画一的な治療から、より個別化された綿密な治療計画が求められるがん治療においては、

特に、放射線医療計画や特異性の高いホルモン療法、分子標的薬剤を効果的に選択するため、精度の高い腫瘍組織の描出が必要とされる。現在利用されている「FDG-PET(*)」(体のどこにガンがあるのか画像として見るもの)との融合を図りながら、新たな低酸素イメージングの導入によつて的確な治療法の確立を目指す。

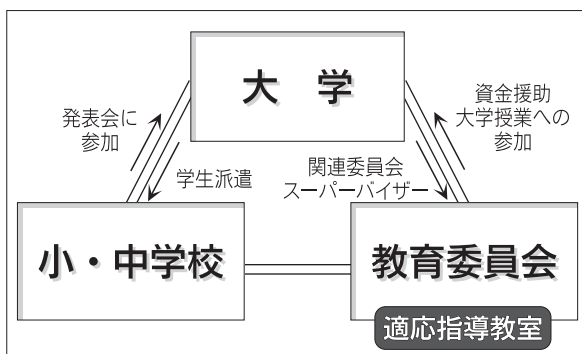
(*) がん細胞が正常細胞に比べて3~8倍のブドウ糖を取り込むという性質を利用したがん検査の方法

4 社会貢献

地域への知の還元で豊かな社会づくりを

社会貢献に係る長期目標として、「優れた教育、研究、医療を通して地域発展をリードし、豊かな社会づくりに貢献します。」、さらに「ここで学び、働く人々が誇りと希望を持って積極的に活動するために必要な組織・体制を構築し、社会から頼りにされる元気な大学になります。」を掲げ、地域社会の発展をリードし、次代の地域社会や国際社会も視野に入れた豊かな社会づくりへの貢献を目指す。

すでに、長期的な取り組みにより成果をあげる教育地域科学部の『探求ネットワーク事業(1995年度~)』は、「紙すき」や「歴史たんけん」など小中学生が自ら選んだテーマをもとに、大学生スタッフと共同で探求を進めていく。また『ライフパートナー事業』は、1994年に福井市教育委員会との協働で始まり、現在は福井県内の7市町に拡大している。これは、主に不登校の小・中学生が、



ライフパートナー事業における大学・学校・行政のパートナーシップとコラボレーション

大学生と一緒に遊びや勉強を行うことを通じて自己肯定が図られ、他者との関係が築けるようになることを目的とするもの。これらのいずれの事業も、学生が地域の子どもの課外活動支援を通じて、教員としての実践的な素養を身に付けることが期待される。

<産学連携・社会貢献の実績例>

●地域プライマリケア講座

今日、全国的な問題となっている医療崩壊の進む地域への対策として、「医師を育てるための仕組みづくり」、「保健・福祉分野の強化や連携」など地域医療再生に向けたアクション・プランが提言されスタートした。現在は、高浜町内の医療機関に設置した研究室で学生や研修医を受け入れ、患者と最初に接し、初診以降の療養の方向を診断する「総合医」の育成を図る。

●緊急被ばく医療に強い救急総合医養成コース

わが国エネルギー産業の根幹となる原子力発電所の有数の立地県に所在する大学の使命として、中核的役割をなす医療機関に「緊急被ばく医療に強い医師」を配置し、地域全体の「緊急被ばく医療体制」を整備するもの。地域医療とともに緊急被ばく医療の充実を図り、住民の健康と安全に貢献する。

●ふくい産学官共同研究拠点

社会的課題(低炭素社会の実現、エネルギー源の多角化)の解決を、地域経済の活性化に結びつけることをねらいとしたもの。2009年度に、福井県・福井大学・福井県経済団体連合会が共同で整備を計画し、科学技術振興機構(JST)の「地域産学官共同研究拠点整備事業」に採択された。地域が持つ技術を活かした共同研究などを展開することで、新開発の実現、環境・エネルギー貢献産業の育成を図る。

インタビュー

日本海に面し、豊かな自然をはぐくむ『越山若水』の福井県。中部・北陸・近畿をつなぐ要衝の国立大学として、研究と産業、また学問のあるべき姿を、福田優学長と寺岡英男副学長にお聞きしました。



福田 優 学長

1973年京都府立医科大学助手、1975年京都府立医科大学講師、1980年福井医科大学教授（医学部）、2001年福井医科大学医学部医学科長、2002年福井医科大学医学部附属病院病理部長、2003年福井大学副学長、2004年国立大学法人福井大学理事副学長を経て2007年国立大学法人福井大学長に就任。専門は腫瘍病理学、老化と腫瘍の分子病理学、定量組織化学。



寺岡 英男 理事（教育・学生担当）副学長

1977年福井大学教育学部講師、1980年福井大学教育学部助教授、1994年福井大学教育学部教授、1999年福井大学教育地域科学部教授、2004年国立

大学法人福井大学教育地域科学部附属小学校長、副学部長、学長特別補佐、大学院教育学研究科教授、教職開発専攻長を経て2010年副学長就任。専門は教育方法学。

■学長から見た大学の特徴

—大学や学生の特徴、印象をお聞かせください。

福田 福井大は、学生数が大学院含め約5,000人、教職員が約1,600人の小規模な地方国立大です。学生の構成は、地元福井県の出身者が40%を超えていますが、中部、関西からの出身者も多いです。福井県の県民性もあると思いますが、学生の傾向は真面目でおとなしい印象を受けますね。何事も誠実に取り組むということは確かに重要ですが、国際化とともに競争社会になった現代においては、大学も社会に通用するリーダーシップを発揮できる、グローバル人材の育成を強化しているところです。2003年に福井医科大と福井大が統合したことで、最初は医学部と教育地域科学・工学部の間の文化の違いを感じることもありましたが、最近では3学部の協調性がとれて、共同研究やコミュニケーションも増えています。今後さらに3学部が協働した総合力を発揮していく方策を進めていきたいと考えています。

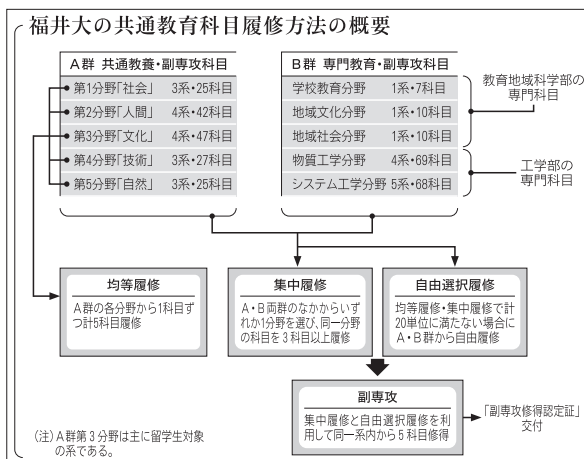
■柔軟なカリキュラム体制で学生一人ひとりに沿ったフォローを

—福井大の教育方針、教養教育への取り組みについてお聞かせください。

福田 昨年10月に学生アンケートを実施したところ、家族の総収入が年間500万円以下の家庭の学生が34%という結果が出ました。このような学生は、家庭事情を考えたうえでバイトをせざるを得ず、講義以外の自習時間が減っているという状況が明らかになりました。教育にとっては、由々しい事態といわざるを得ません。そこで、今年は教育改革元年と位置づけ、シラバスを含めた教育全般のあり方の再検討ですとか、奨学金制度のあり

方について、議論を重ね、検討しているところです。学生が、アルバイトをせずに学業に打ち込めるような状況に近付けていけたらと考えています。
寺岡 現在、福井大の文京キャンパスでは、一般教育科目を「共通教育」と改称し、学部の手を越えて幅広い教養を身に付けられるようなシステムをとっています。

共通教育で履修しなければならない教養科目は、大きくA群（共通教養科目）とB群（学部の専門教育科目で他学部・学科・課程の学生に開放）に分けられており、A群は「社会」、「人間」、「文化」、「技術」、「自然」の5分野、B群は「学校教育」、「地域文化」、「地域社会」、「物質工学」、「システム工学」の5分野から構成されています。学生は、こうしたさまざまな分野におよぶ科目の履修を、自らの意欲や習熟度に合せて設定できるようになっています。教養教育改革を進めるため、1999年度に共通教育センターを立ち上げたときから現在の履修形態になっています。



また、教養教育でも、座学ではなくもっと協働実践的な、ものを作ったり、地域に出かけて何かしたり、アクションのあるプロジェクト的な科目を、新たな領域として設けたらどうかということで検討しているところです。

一学生自らが主体的・積極的に取り組める、参画型のカリキュラムのようなものですね

寺岡 既にやっているものとしては、教育地域科学部が主体となった「探求ネットワーク」があり

ます。小中学校が土曜休みになった当時、地域に生徒が活動するための受け皿がない、ならば大学で何かをやろう、ということで始まりました。今は月2回の開催で、300人くらい参加していますね。探検や料理など9つのブロックに分かれて、一つのテーマをじっくり長い時間をかけて活動するわけです。子どもにとっては学習になるし、学生にとっては、時間やカリキュラム枠の限られた教育実習とは別に、自分たちで企画・運営して子どもと接しながら活動を組み立てていくことができます。企画力や運営力のほかに、どうやったら子どもたちに効果的に教えられるかというプレゼンテーション能力など、まさにジェネリックスキルの養成にも一役買っているわけです。校舎の一部改装も行なったことで、この活動についてパネル展示をして、広く紹介できるようになりました。
福田 現場での、本当の意味での実習を学生にさせているようなものですね。この「探求ネットワーク」を底流に、そこからいろいろなアイデアが出て立ちあがったのが教職大学院です。これは、小・中学生たち自身が探求し、コミュニケーションし、協働する力を培えるような学校教育を担う、教員の専門的力を養うことを目的に開設したものです。

学校現場へ大学の教員が出向いて、現場の教員とさまざまなディスカッションや実践的な研究をする。そして、周りの学校の先生も巻き込んで、学校ごと教育研究の場にする、ということです。これは、「福井大方式」として、今では全国に知られるようになっていますが、鈴木寛前文科副大臣からも、「（教師教育）改革のモデルにしたい」と高く評価していただきました。

実践的な取り組みとしては、「ライフパートナー活動」も挙げられます。これは、大学生が、不登校の小・中学生と一緒に話し、遊び、ときには勉強することを通じ、自己を肯定し、人に接する喜びを発見することを目的とするものです。現在、福井市をはじめ近隣の7市町との協働で、登校できない子どもの自宅に学生が出向き、マンツーマンで子どもと関係をつくりながら、相談にのった

り遊んだりするわけです。そうした活動を大学の必修にするとともに、市町の教育委員会からは、遠方に行く場合の旅費支給などのバックアップをしていただいています。不登校の子どもにとって、良い機会になると同時に、学生にとっても実地での本当に良い勉強の場になっています。

不登校とか鬱とか多動症とか、いろいろな発達障害をもつ子どもが増えてきているのに対して、専門に扱える医者や心理カウンセラーが足りておらず、子どもたちのところは深刻な危機にさらされています。このような問題に対処するため、「子どものころ」を研究する博士課程後期3年の大阪大・金沢大・浜松医科大の連合大学院に、千葉大とともに新たに参加することにしています。子どもたちを見守り、育て、予防していくための研究をオールジャパンで行い、脳科学、心理学、教育学などとの統合的観点に立つ系統だった教育を行って、科学的な視点から対処できる指導者や高度専門家の育成を目指しています。

■「100%断らない医療」の実現と、 原発立地県としての使命

一地域に根差した社会連携・貢献と教育が連動しているということですね

福田 県と協力してやっている医学部の地域医療もそうですね。近い将来、75歳以上の高齢者が30%近くを占めるという時代がくると、従来の医療体制ではまったく追いつかなくなるでしょう。長い期間入院するような、慢性疾患をいくつかもった方を大きな病院で受け入れてしまったら、急性的に発症した病人を受け入れられなくなってしまいます。いずれは、家庭医、総合医、総合臨床医というものが必要になります。いろいろなカウンセラー、看護師、技師、県内の医師会とも連携して、ITC（情報基盤センター）、情報を共有して在宅の検査所見を把握し、病歴もいろんな人が共有化できる、ということもやらなければいけません。福井大医学部の救急は、全国でもまれなER（Emergency Room）型で、一次救急から三次救

急まで全部やります。これが結実して、現在、福井県内では患者のたらい回しが一件もありません。100%断らない医療を実現できたと考えます。

また、科学技術振興機構（JST）の援助を受けて、緊急被ばく医療に強い救急総合医の養成も行っています。福井県は、「もんじゅ」を入れたら14基の原発を持っていますから、アクシデントに備えて緊急被ばくに対応できる医師を養成しないといけません。今回の東日本大震災でも、医学部の救急医が駆けつけて、Jヴィレッジ（救急搬送拠点）で除染活動などを行いました。

一原発立地県における大学としての役割も、今後ますます大きくなるのではないのでしょうか

福田 工学研究科は、N専攻といまして原子力・エネルギー安全工学専攻をもっています。それから、附属国際原子力工学研究所を2009年に設立し、医療などへの応用研究から防災・危機管理といった研究まで広く行っています。3月11日の大震災以降、各方面でいわれているように、ゆくゆくは自然エネルギーに置き換えられていくことが望ましいとは思いますが、今現在ここにある以上、すぐに原子力から手を切ってしまうことは不可能です。代替エネルギーが整備されるまでは、しっかりと安全を担保したうえで原子力と付き合っていかなければいけません。そのために、われわれは原子力政策に対して、賛成とか不賛成とかいう立場をこえて、学問的にしっかりと原子力を研究することが重要です。アジア各国にどんどん原子力研究所ができていますが、原子炉の設計や高度な原子力発電の技術は、日本がトップです。人材育成も含めて、純粋に不偏不党の学問として、研究をしっかりとやって成果を出していきたいと、これが本学の使命であると考えています。これは、日本だけでなく国際的にも使命を負っていると自負するとともに、身の引き締まる思いを感じますね。

■きめ細かな就職支援システムで 「ミスマッチゼロ」を目指す

—就職率について、福井大はここ数年ずっとトップを走っているとお聞きしました

福田 就職支援室は、入学時から学生の意識を高める「キャリアガイダンス」を開催したり、トータル情報システム「学生支援e-supportシステム」を運営したりしています。これは、求人閲覧・ガイダンス・企業説明会の情報を配信するもので、学生が、携帯電話から常に最新情報を得られる仕組みです。また、就職が決まった学生の内定先に就職委員や支援室長が訪問して、さまざまなアンケートを取ったり要望を聞いたりというアフターケア、フォローアップも欠かさず行っています。このような支援によって目指しているのが「ミスマッチゼロ」です。福井大は、高い就職率に加えて離職率が8.8%と低いことが特徴。定着率の高さがよくわかりますが、今後さらに、学生と企業のニーズのミスマッチを抑えていきたいと思いません。

—企業に対する要望などありましたらお聞かせください。

福田 青田刈りみたいなことをして、卒業要件をまだ充分満たしていない段階の学生を採用するというのは、やめてほしいですね。就職活動というものが抱えている日本的な問題は非常に大きく、例えば、海外でじっくり勉強していると就職できない、ということにもなります。こういうことで、学業や多くのチャンスが阻害されるようなことがあってはなりません。大学としても、しっかりと人間力を持った人材の養成、グローバルな人材の育成をしようと取り組んでいます。例えば、今年の4月に語学センターを立ち上げました。まずは国際通用語である英語をマスターしてもらう。単に読み書きのような受験英語から離れて、プラクティカルなコミュニケーション、英語でものを考えて英語でコミュニケーションできる人材を、ひとりでも多く育てようということです。実践的

な英語会話、コミュニケーション力をつけることを目指しています。

■キャンパス自体のグローバル化、 社会に還元される研究に向けて

—さらに充実させていきたい研究・事業など、今後についてお聞かせください。

福田 現在、学生食堂の一部を改装して、国際交流ラウンジを作ろうとしています。留学生と日本人学生双方から「交流したい」という要望があるのですが、なかなか適当な場所がないのが現状です。そこで、交流の場としてのラウンジを作って、コーヒーなど飲みながら気軽に交流を図れるような場にしたいと考えているところです。

また、研究面をさらに充実させていきたいと考えています。特に、成果を地域や国に還元することが大切です。現在でも、世界に誇れるような特色ある研究を行っていますが、こうした優れた研究をさらに伸ばしていけるような支援を行ってきたいと思いません。一例を挙げますと、PET（陽電子放射断層撮影）を使ったがん診断はすでに一般的に行われていますが、高エネルギー医学研究センターでは、さらに正確にがん細胞を描出するための技術を開発しておりますし、工学部でも、「窒化物半導体」という新しい半導体によって、これまでより飛躍的に効率をアップした太陽光発電の開発に向けた研究が進められています。

研究面の充実というのは、良い教育と不可分であって、良い研究なくして良い教育はありえないんですね。ここが小中高の教育と違うところです。世界トップレベルの研究・技術を熟知したうえで、最新の知見を学生に教授することが重要だと考えています。教育と研究が両輪で前進する、結果として社会貢献につながっていく、ということではないでしょうか。